

戦時下ジャーナリズム研究家・高崎隆治氏 インタビュー 「戸田城聖の平和思想」

高 崎 隆 治

高崎隆治（たかさき・りゅうじ）1925（大正14）年生まれ。神奈川県横浜市出身。法政大学文学部卒業。在学中に学徒兵として戦争を体験する。日本ペンクラブ会員。法政大学文学部講師、講談社昭和万葉集編纂顧問等を経て、立教大学文学部で「戦時下のジャーナリズム」を担当する。1996年度、（財）京大人文学研究協会・研究奨励賞受賞。2013（平成25）年没。

著書に『戦争文学通信』『戦時下文学の周辺』（以上、風媒社）、『ペンと戦争』（成甲書房）、『文学の中の朝鮮人像』（青弓社）、『川柳にみる戦時下の世相』『従軍作家里村欣三の謎』（以上、梨の木舎）、『雑誌メディアの戦争責任』『戸田城聖 1940年の決断』『新潮社の戦争責任』（以上、第三文明社）ほか。

聞き手 駒野晃司
平山伸正

駒野 お忙しい中、時間を割いて下さり、ありがとうございます。今回、「戸田城聖の平和思想」と題し、高崎隆治先生にインタビューさせていただきたいと思います。

私たちは高崎先生の著書を読みながら、歴史の真実にどのように迫っていけば良いのか、考えてきました。そこで、今回のインタビューを通じて、高崎先生にその研究手法の一端もお聞きしていきたいと思います。

高崎 よろしくお願ひします。

1. 創立者の言われる「正義」とは

随筆 新・人間革命「第二の草創期」

駒野 創立者は以前、聖教新聞紙上において、随筆「第二の草創期」を執筆されておられます。

Ryuji Takasaki（戦時下ジャーナリズム研究家）

ここで、その一部を読んでみたいと思います。

君たちこそ、未来の平和を守り決定しゆく、気高き学徒なのだ。
断じて、権力や権力者等に左右されるな！ 尊きわが民衆のために、力をつけるのだ。
君にしか成し得ぬ、傲慢な権力への仇討ちを、庶民のために勝ち抜くのだ¹。

おそらくここに、創大生に対する、もっと言えば日本全国の学生に対する創立者のメッセージがあると思います。

高崎 私も聖教新聞を読んでいます。池田名誉会長はしばしば「正義」ということを言いますね。池田名誉会長の言う「正義」とは、「本当の意味での正義を守り、貫いて行け」ということだと私は考えています。これは、権力者やメディアの言う「正義」とは、区別して考えなければいけません。

近代以降、日本においてはメディアは一つの権力となっています。権力機構というものは、大衆を自分たちの都合の良い方向に意識的に向かせようとして、正義を捻じ曲げて述べようとします。大体において、権力者は自分たちの行動を「正義である」と言うのです。しかし、そのほとんどは、不義不正であります。だから、池田名誉会長は、私たちが本当の正義を見極めることを一番期待しているのではないのでしょうか。「本当の正義とは何か」ということを見極めて、「その正義を守って戦わなければならない」と、池田名誉会長は繰り返し言っているのだと思います。

平山 それは、国家が規定する「正義」、あるいは、国家が叫ぶ「正義」ということに対して、創立者の中に絶対的な不信感があるからではないのでしょうか。

「明治が良かった」、あるいは「戦前が良かった」と言う人間の多くは、「1910年代生まれ」、あるいは「1930年代生まれ」だが、一番不幸な時期を経験した「1920年代生まれ」の人間は、間違っても「昔は良かった」という発言はできないと、高崎先生はお書きになっていたと

¹ 創立者の随筆「第二の草創期」は、2003年12月1日、聖教新聞の二・三面に掲載された。以下、その一部を引用する。

学問と喜んで決闘しゆく学生たちよ！／君よ、学べ、悩みに負けず、学べ！ 君よ、学び抜け、確固たる求道心で、働きながら学べ！／そして、父母を忘れずに！／君たちこそ、未来の平和を守り決定しゆく、気高き学徒なのだ。／断じて、権力や権力者等に左右されるな！ 尊きわが民衆のために、力をつけるのだ。／君にしか成し得ぬ、傲慢な権力への仇討ちを、庶民のために勝ち抜くのだ。／さんざん嘘で固めた、売らんがための活字文化を、学問という法則から、厳正に糾してゆくのだ。／君よ、徹頭徹尾、喜び勇んで、学問を勝ち取ってくれ給え！／いわゆる金儲けや、有名になるための策士にはなるな！／金城鉄壁な人格と智慧と学識をもって、勝利、勝利の固い握手をしようではないか！／君たちの栄光と勝利が、私の栄光と勝利だ。／永久に残りゆく名誉ある権利を磨くために、君よ、今日も現実の荒波を乗り越えながら、真剣に学びゆけ！／そして、断じて勝ってほしいのだ。

思います²。

高崎 池田名誉会長は私より若いので、もっと心に深い傷を受けたと思っています。なぜなら、池田名誉会長は戦争が終わった時、未成年だったはずだからです。つまり、一番多感な年齢の時に戦争を体験されたということです。戦時中、私たちは命令には従ったけれども、心からは従わなかった。ところが、「少国民³」は心から命令に従うことを強要されたのです。だから、「少国民」は戦争が終わった後も、辛かっただろうと思いますね。

駒野 現代に浮上している問題の原因は、戦時中の日本軍部を中心とした管理社会⁴の中にあつた、と高崎先生は分析されています。私たちは日本軍が残した過去の罪を見極めていかなければならないと思います。そのことを抜きにして正義などないということですね。

高崎 そういうことになりますね。だから、まずは正義の中身を見極めることです。つまり、それが不義不正であるのかどうかをきちんと捉えることです。

創立者と戸田城聖

高崎 最近、私はよく考えるのですが、池田名誉会長は本当に偉い人ですね。戸田城聖から教わったことを100パーセント以上と言えるほど正確に受け継いで、今の創価学会を作り上げたと思います。だから、私は池田名誉会長の言動を見て、「戸田城聖はこういうことを教えたんだな」と考えるようになりました。教わったことを忠実すぎるほど守っています。自分の先生の言われたことをそこまで正確に行動に移せるものなのかと、私は感心します。『人間革命⁵』などを読むと、それがよく分かりますね。

平山 「文体は思考の鏡である」とよく言われますけれども、戸田先生の語りでしか伝えられなかったものが、創立者の中で継承されているのかもしれない。また、そのスタイルの中に牧口先生から受け継がれている平和への思いがあるのでしょうか。

高崎 池田名誉会長の先生である戸田城聖という人物も、調べれば調べるほど、考えれば考えるほど、偉いと思います。戸田城聖の肉声を録音したテープがあります。それを聞くと、戸田城聖の話し方、語り口が池田名誉会長とそっくりでした。話の主題は違っても、語り方は全く同じだと思いました。池田名誉会長は戸田城聖を尊敬し、また、戸田城聖の言うことを深く考えていたのでしょうか。よほどの決意を持たないとそのようにならないと思います。

駒野 戸田先生の肉声をレコードに残そうと提案したのは創立者でした。

² 高崎隆治は1925（大正14）年、横浜市に生まれる。
一方、創立者池田大作は1928（昭和3）年、東京府荏原郡大森町（現・東京都大田区大森）に生まれる。
高崎隆治と池田大作は、共に「1920年代半ばの世代」である。

³ 注（24）を参照。

⁴ 本インタビュー、125-131頁を参照。

⁵ 池田大作『人間革命』全12巻（1965年-1993年4月、聖教新聞社）。

2. 過去と現在の関係性

過去への問いかけ

駒野 高崎先生はこれまで、「戦争の記憶の継承」を学問の主題にしてこられました。これからの日本社会を担っていく私たちは、戦争を知らない世代であります。

高崎 若い世代は過去を切りたがるけれども、過去と現在というものは切れていないのです。つまり、現在は過去の累積の上でできあがっています。だから、過去に問いかけることによって、未来の進むべき道が明らかになるわけです。それを「過去は終わったことだから今は関係ない」というように考えることは非常に危険です。過去の出来事を反省しない限り、妙なことを考えて、日本はどこかで植民地支配をしようとするかもしれません。過去を隠すことによって、現代が成立しているような部分がありますが、私はそれが恐いのです。

ドイツではいまだに、ナチスの戦争犯罪を追及しています。しかし、日本は過去の戦争犯罪を徹底的に追及していないのです。

平山 私たちがどのように戦争の記憶を継承していくのか、これは非常に困難な課題であろうと思います。

高崎 例えば、あなたたちで言えば、牧口常三郎、戸田城聖が「何を考え、何をしてきたのか」ということに照明を当てて考えるということです。それが過去を学ぶということなのです。私は、池田名誉会長が過去から非常に多くのことを学んでいると思います。

駒野 過去への問いかけによって、初めて未来への道が切り開かれるということですね。

高崎 そうです。現実への批判は、現実によってできるものではありません。それは、私たちが理想を持つことで批判できるのです。では、その理想とは何か。例えば、失業や就職難のない安定した生活。もっと大きく言えば、戦争のない社会ですね。最高の理想は「平和」です。したがって、その理想を高く掲げれば掲げるほど、現実を鋭く批判できるのです。低い理想では、現実への批判がぬるくなってしまいます。

また、「平和」が理想だとすれば、それを妨げる行動があるわけです。つまり、戦争や破壊、^{さつりく}殺戮ですね。そのような破壊の原因について考えることで、自分の父母の世代がどのように平和を願望していたのかが分かってくると思います。

戦争を直接知らない20代の若者の父母の世代は、今、60歳前後になっています。たとえ、その人たちが戦争を知らなくても、戦後社会の最初の5年、10年の間に、どれほど飢えに苦しんだか、^き飢餓に直面したか、就職が難しかったかを知っているわけです。

平山 私たちは戦争の恐ろしさについて、戦後の歴史からも学びとることができるということですね。

高崎 今の若者の父母が子どもだった頃、やはり、平和と言えるような状態ではありませんでした。なぜなら、1950（昭和25）年に起きた朝鮮戦争の時には、アメリカ軍が原爆を使うのではないかと新聞で報道され、それを日本人は非常に恐れていたからです。戦争ではなく

でも、平和が非常に不安定になり、第三次世界大戦が起こるかもしれないという不安、恐怖を感じる時代に彼らは生きてきたわけです。

もし、戸田城聖が今、生きていたら、危険な兆候だと考えるのは確かだと思います。そして、戸田城聖は「世界の人々とどうやって手をつないでいくか」「戦争を阻止できる道を教え、そして、それを広げていく」というような方法を考えると思います。

平山 理想の高さは、現実をどれだけ鋭く批判できるかにかかっているとも言えますね。

3. 戦争の記憶の継承

【推理】

駒野 高崎先生は1925（大正14）年にお生まれになり、1937（昭和12）年の日中全面戦争、さらに、1941（昭和16）年の太平洋戦争の勃発などをはじめ、戦争の全期間、幼少期・青年期を過ごされました。そこで、1945（昭和20）年8月15日の終戦に至るまでの戦争体験について、お話をお伺いしていきたいと思います。はじめにお聞きしたいのですが、高崎先生は小学生の頃、特に心に残った出来事はありましたか。

高崎 今から思うと、私が小学校五、六年生の時の担任は創価教育学会のメンバーではなかったかなと思います。彼の名前は海老原^{えびはらかつまさ}勝正先生です。彼は全教科の中で算数が得意で、戸田城聖の『推理式指導算術』に影響を受けたのではないかなと思います。彼は口癖のように「算術は推理である」と言っていましたね。今、考えると、彼は国語の時間にも「推理」という言葉を時々言っていました。

平山 その頃、「推理」という言葉は一般的に使用されていたのでしょうか。

高崎 今では、「推理」という言葉を子どもでも使いますがけれども、あの頃、私にとっては新しい言葉でしたね。彼から初めて「推理」という言葉を聞きました。

当時、「推理」という言葉は、一般的に使われる言葉ではありませんでした。私が小学校に入学したのは1932（昭和7）年で、創価教育学会は1930（昭和5）年にできていますね。その頃の創価教育学会を調べてみると、当初は圧倒的に教師が会員に多かった。しかし、1937（昭和12）年に起きた日中戦争の頃から、教師でない人たちが会員になっていくわけです。そこでの会合の記録はないのでしょうかけれども、「推理」によってもものを知る、ものを作り出す、値打ちのある人生を送ることができるということを会合でしばしば言っていたのではないのでしょうか。そして、創価教育学会の会員は、「推理」によって、戦争の状況や成り行きを考えるようになっていったのではないのでしょうか。

平山 ということは、当時、「推理」という言葉を使っていた人は、戸田先生と関係があったということでしょうか。

高崎 おそらく、教師で「推理」という言葉を使っている人は、会員でないまでも創価教育学会の機関紙を読んでいたでしょうね。

それから、彼（海老原先生）の経歴が戸田城聖とよく似ているのです。最初、補助^{くんだう}訓導でしたが、その後、正規教員の資格を取っているのです。また、授業で日蓮の話ばかりしてね（笑）。例えば、「天皇が神ならば、人間として一番偉いのは日蓮ということになる」と言っていましたね。また、「日本の歴史は600年ほどごまかしがある」「21代以前の天皇の歴史ははっきりしていない」ことも教わりました。

彼は、戸田城聖が正規の師範学校を卒業していないことを知った時点で、戸田城聖の言うことに共鳴したのだらうと思います。自分と同じような人がいるということ。

駒野 当時は「天皇は神である」ということが当然視されていた時代です。そのような時代状況の中、担任の先生は非常に先見性のある授業を実践されていたのですね。

火野葦平『土と兵隊』（1938年）

平山 高崎先生は1938（昭和13）年、中学一年生の時、火野葦平^{ひのあしへい}（1907-1960年）の『土と兵隊⁶』を読まれております。この時代は書物がことごとく検閲され、中でも戦争の実態を明らかにした書物には削除命令がなされた時期です。高崎先生は13歳の時、『土と兵隊』には何かが削除されているのではないかと疑われ、そこを追究されておられます。

高崎 そうですね。私はそれについて文章を書いたことがありました。戦後、明治大学の平野謙がそれを褒めてくれました。そのことについては、平野謙の『昭和文学私論⁷』の中で触れられています。

私は中学一年生の時、『土と兵隊』の中で「捕虜の虐殺」部分が削除されていることを知ったのです。私がどのようにしてこの削除を知ったかということ、その捕虜の中に二人の少年兵がいます。当時、その少年兵と年齢が同じぐらだと私は思いながら読んでいたので

⁶ 火野葦平『土と兵隊』（1938年11月、改造社）。

⁷ 平野謙『昭和文学私論』（1977年3月、毎日新聞社）。

同書の「捕虜の取扱いについて」に収録されている。以下、関連部分を引用する。

『火野葦平と石川達三』のなかで、高崎隆治は『麦と兵隊』の最後の場面の削除について書いている。／「私は眼を反した。私は悪魔になってはみなかった。私はそれを知り、深く安堵した」という『麦と兵隊』の最後の文章のすぐ前に、初出發表では二百字分くらいカットされていたわけだが、その削除について、「その程度の想像は、末期戦中派の前記少年たち（高崎隆治自身をふくむ）にも可能であった」と、書いている。私はこの高崎さんのいいぶんにまず感心した。私の記憶では、この箇所がオカシイと特に頭をひねったおぼえがなかった。それだけに、高崎さんのいわゆるイカれた大人のひとりとして、「文脈の断層」を発見した少年高崎隆治の眼力に推服したわけである。日本人によく似たひよわそうな若い兵隊、つまり、捕虜になった少年兵まで斬殺したと読みこんだ少年の眼に対して、私はみずからを恥じなければならぬと思ったのである。／捕虜虐殺は『麦と兵隊』だけではない。『土と兵隊』のなかにも、捕虜三十六人を皆殺しする場面が削除されていて、そのことに関しても高崎隆治は「自己の非力と戦場の過酷を、いまさらのごとく思い知らされたのである。火野に肩入れするつもりは毛頭ないが、彼の悲しさ、彼の無念さはこの行間にみなぎっているのだ」と論じている。つづけて「もはや火野に可能なことといえば、たとえば、中国軍の機銃に誤射された瀕死の母親に危険をおかして近づき、投出されている赤ん坊にふとんを掛けてくる（中略）程度のことでしかないのだ」と、論じている。私はこの論旨に推服するものである。（350-351頁）

すが、途中からその少年兵がどこにも出てこなくなるのです⁸。それで、私は「この少年兵は
どうしたのだ？ 途中で文章が切れているのでは？」と考えたわけです。しかし、「これは
単行本だからこうなっているのだろう。だったら、その単行本の元になっている雑誌を買
えばいいんだ！」と私は思って、横浜中の古本屋を探し回りました（笑）。そして、その雑
誌を見つけ、それを出版したのは文藝春秋社だと分かりました。しかし、雑誌と単行本に
掲載された内容は全く同じものだったのです。

平山 ということは、雑誌の段階で原稿に何らかの削除命令が下っていたということですね。

高崎 そうですね。戦後に出版された文庫では削除部分が埋まっていた。そこを読むと、や
はり、捕虜が虐殺されていました⁹。

日本軍が捕虜を殺したことに気がきました。それで、「少年兵を殺すような戦争に正義な
んかない！」と思いましたね。

火野葦平は『土と兵隊』の他に、『麦と兵隊¹⁰』『花と兵隊¹¹』も書いています。私はそれら
も読み、「削除されていることは100パーセント間違いない」と思いましたね。

数年前、私の戦友が訪ねて来て、彼は私に「ものを書いているそうだな。戦争中に、『俺
は小説家になるんだ。火野葦平のような作品を書くんだ』と言っていたな」と言ったのです。

⁸ 関連部分を火野葦平『土と兵隊』より以下、引用する。
私は暗闇からにゆつと銃眼の光の中に出た兵隊の顔が、あまりにも若く美しかったので、どきりとした。二人とも同じ位若く、殆ど少年であつたのだ。〔……〕少年兵の悲しみにつぶれた顔に、かすかな喜びに似た影がかすめたやうに思つた。
私は胸の中に説明しやうのない、淋しさとも、怒りともつかぬ感情が渦巻くのを感じた。私が表に出ると、そこに兵隊が居た。二人の少年兵を渡して私は又、トーチカの中に入つた。〔……〕部隊本部のある先刻の部落まで歸つて來ると、ずらりと捕虜が竝んで居た。吉田一等兵が來て班長、飯は出來とりますよ、と云つた。私は家の中に入つた。私は裏のクリークに出て顔と手を洗つた、耳を少し怪我したやうだ。久し振りで食ふ米の飯は何ともいへずおいしかった。／ここに一枚の布片がある。これらの支那兵の一番えらい兵隊が腕につけてゐたのである。(169-171頁)

高崎は中学二年生の時、「ここに一枚の布片がある。〔……〕」という文章以降、捕虜として囚われていた二人の少年兵がどこにも出てこなくなり、それに対して疑問を抱く。そして、そこに文章の断層があることは確実であり、その断層部分には、日本軍によって少年兵を含む捕虜が虐殺された実態が記されているのではないかと指摘した。

⁹ 戦後、文庫として火野葦平『土と兵隊・麦と兵隊』（1953年1月発行、新潮文庫／1970年3月改訂、新潮文庫）が出版された。その文庫には、戦時中に削除された文章が加えられている。以下、その部分を引用する。

見ると、散兵壕のなかに、支那兵の屍骸が投げこまれてある。壕は狭いので重なり合い、泥水のなかに半分は浸っていた。三十六人、皆殺したのだろうか。私は黯然とした思いで、又も胸の中に、怒りの感情の渦巻くのを覚えた。嘔吐を感じ、気が滅入って来て、そこを立ち去ろうとすると、ふと、妙なものに気づいた。屍骸が動いているのだった。そこへ行行って見ると、重なりあった屍の下積みになって、半死の支那兵が血塗れになって蠢いて居た。彼は靴音に気付いたか、不自由な姿勢で、渾身の勇を揮うように、顔をあげて私を見た。その苦しげな表情に私はぞっとした。彼は懇願するような眼つきで、私と自分の胸とを交互に示した。射ってくれと言っていることに微塵の疑いもない。私は躊躇しなかつた。急いで、瀕死の支那兵の胸に照準を附けると、引鉄を引いた。支那兵は動かなくなった。山崎小隊長が走って来て、どうして敵中で無意味な発砲をするかと云つた。どうして、こんな無残なことをするのかと云いたかつたが、それは云えなかつた。重い気持ちで、私はそこを離れた。(98頁)

¹⁰ 火野葦平『麦と兵隊』（1938年9月、改造社）。

¹¹ 火野葦平『花と兵隊』（1939年8月、改造社）。

そういえば、彼にそんなことを言ったような気がしました（笑）。

駒野 『戸田城聖 1940年の決断』の中で、高崎先生は「正義を唯一の価値観とする私の心の中で、『大日本帝国』は不義不正の見本ようになってしまった¹²」と書かれていますね。

高崎 日中戦争が開始された時、私は「日本というのはでたらめな国だ」、また、「今に何とかなる。日本は行き詰って、中国から撤退するであろう」と思っていました。ところが、1941（昭和16）年12月8日、日本軍部が太平洋戦争を開始したのです。その時は、「まさか」と思いましたよ。というのは、「少しは頭のいいやつが権力の中核にいて、何とか、戦争は回避するだろう」と思っていましたから。

私は中学校の卒業アルバムに、「希望はいつの日も捨てずに生きよう¹³」と書いた覚えがありますが、それは、絶望の挙句^{あげく}に書いた言葉です。

女流作家の作品

駒野 高崎先生は戦時中、どのような本を読まれていたのでしょうか。

高崎 火野葦平の『土と兵隊』や佐々木元勝^{もとかつ}の『野戦郵便旗』^{やせんゆうびんき}ですね。戦争に関する本はそんなに読んでいません。兵隊に行く前に、つまり、中学の上級から大学予科の一年生、二年生の頃に読んだのは、実は、女流作家の作品¹⁴が多いのです。「女流作家は若者の悲しみや苦しみ、嘆きを分かってくれているのではないか。男の作家には分からない」と私は思っていました。あの頃の女流作家の作品は、ほとんど読みましたね。

駒野 それらの作品はどのようにして読まれたのでしょうか。

高崎 立ち読みの場合もありますし、自分で買った場合もありました。林芙美子^{ふみこ}（1903-1951年）の作品は全て買いましたね。また、私が中学四年生か五年生の頃、同級生の姉や妹が女流作家の作品を読んでいたので。だから、私は「お前の姉さん、よく小説を読むと聞けれど、どんなの読んでいる？」と聞いては借りていましたね（笑）。

しかし、当時、女流作家の作品を読むのはちょっと具合が悪かったので、私は林芙美子の作品を買う時、周りをきょろきょろしながら、誰もいないことを確認して買っていました（笑）。

法政大学入学後、戦争へ動員される

平山 高崎先生が法政大学へ入学されたのは、1943（昭和18）年です。その後、高崎先生は徴兵検査を受けられております。それはいつ頃なのでしょうか。

高崎 1944（昭和19）年の3月、私が満18歳の時です。1925（大正14）年、1926（大正15）

¹² 高崎隆治『戸田城聖 1940年の決断』（2002年2月、第三文明社）、62頁。

¹³ 高崎隆治『戦争文学通信』（1975年12月、風媒社）、239頁。

¹⁴ 高崎隆治『戦場の女流作家たち』（1995年8月、論創社）を参照。

年生まれの人は、徴集年齢が1年切り下がり、早まったのです¹⁵。そのため、私が1943（昭和18）年に法政大学へ入学した1年後、徴兵検査がありました。

駒野 『戦時下文学の周辺』の中で、高崎先生は「学校→工場→戦場という、『出陣』組とは異なる経路¹⁶」を辿られたと書いておられます。そして、ある日、工場での労働を終えて帰宅すると、見知らぬ男から『満州要員』と記され」た一枚の紙片を渡されたとあります¹⁷。

高崎 「満州要員」というのは、ただ判が押しあただけです。一緒に入隊した、現役徴集の仲間には、みんな満州要員と書いてありました。その中の一部が満洲へ行き、残りは原隊に残って沖縄要員となったのです。それで、私は沖縄要員だったわけです。しかし、船がなかったために、最終的には、1945（昭和20）年4月、千葉県九十九里へ行くことになりました。

戦争体験

駒野 高崎先生の著書から、「軍隊」について詳しく学びました。戦争を学ぶといっても、100の戦場があれば100通りの状況があるわけですね。

高崎 だから、銃を取った人間だけの話から戦争を学べるということではないのです。例えば、毎晩のように空襲警報があった東京で、戸田城聖は「どんな思いで戦っていたのか」ということを考えることも、戦争を学ぶ一つの重要な鍵だと私は思います。そして、そこから

¹⁵ 当時の状況を知るために、久保義三編著『現代教育史事典』（2001年12月、東京書籍）参照。

学徒出陣 1943年の学徒出陣にあたっては、同年10月の文部省通達「昭和18年度臨時兵役調査ヲ受クベキ学生生徒ノ取扱ニ関スル件」（発専149号）により翌年9月に卒業見込みの学生を「仮卒業」とする処置がとられた。さらに1944年9月14日の文部省通達「仮卒業証書授与者等ニ対スル卒業証書授与ニ関スル件」（発専216号）では戦死者などに氏名に「故」をつけて卒業証書を与える処置がとられ、1945年5月22日の「戦時教育令」では従軍中の学生・生徒への卒業認定が緩められた。／学徒出陣は若い学生・生徒の悲劇として語られるが、在学中の徴集延期自体は高学歴者への優遇措置であること、さらに出陣した学生の多くは陸軍の幹部候補生や海軍の予備学生として訓練の後に少尉に任官されたことも看過すべきではない。また、総力戦の遂行のために必要な各種の理工系技術者や軍医の養成のため、理工系の在学中の徴兵の行われなかったことも注目されよう。（高橋陽一）

1943（昭和18）年10月21日、文部省主催「学徒出陣」の壮行会が神宮外苑競技場で行われたのであるが、高崎はそれに対して、以下のように指摘している。

神宮外苑のはでな壮行会や大観衆に見送られ、集団として入隊していったかれらと、そのときかれらを見送った側でありながら、みずからは見送る一人の観衆も仲間ももたず、ひとりひそかに営門をくぐり、あまつさえまともな訓練も受けず、補充要員としてただちに前線へ送られ、そのまま死んでいった学徒が、「学徒出陣」の「栄光」のかけに無数に存在した事実は、まったく知られていないのである。（高崎隆治『戦時下文学の周辺』〔1981年2月、風媒社〕、98-99頁）

高崎は、彼らの「そのごの軌跡が、『出陣』組の過大な『脚光』の陰に忘却されて」（前同、101頁）いること、かつ、「『出陣』組よりもむしろ、かれらのほうこそがよりいっそう悲惨であり不幸であったといえる」（前同）と主張している。

¹⁶ 高崎前掲書『戦時下文学の周辺』、102頁。

¹⁷ 前同、106頁。また、その頃の徴兵制について、「すでにこの時点で徴兵年齢は1年はやめられていた（1924年生まれと25年生まれはいっしょに徴兵検査を受けていた）から、明日といわず、きょうにも現役兵としての入隊通知が舞い込んでくるかもしれない状況におかれていたのである」（前著、102頁）と記している。

生命の大切さを学べると思うのです。

平山 高崎先生は剣道部出身でした。剣道部出身者は皆、海軍予備学生や陸軍の特甲幹や特別操縦見習士官に志願していた中、高崎先生は志願されませんでした。しかし、そういう生き方もあったということですね。

高崎 私は志願しなかった代わりに殴られましたよ。「貴様、剣道部の有段者のくせに、なぜ志願しなかったのか！」と怒鳴られました。私はあらかじめその答えを用意していたので、こう言いました。「志願すれば将校になり、私は少なくとも、100人近い部下を持つことになって、彼らに命令を下さなければならなくなる。もし、私の命令が間違っていたら、部下たちは全滅するかもしれない。だから、私は指揮官としての自信がなくて、志願しなかったのです」と。そしたら、「そんなことは貴様の決めることではない！ 軍隊が決めることだ！」と言われて、殴られました。「ああ、そうか。軍隊はこういうところか」ということがよく分かりましたね。

平山 志願することと志願しないこととは、軍隊での扱いが決定的に違うということですね。

高崎 そうです。軍隊に志願しないということは、「積極的には参加しない」という意思表示です。一方、特攻隊の航空兵は、実は全員が志願者ですよ。志願した結果として、そこに組み込まれたわけです。

しかし、私の場合、たとえ最下級の兵士であったとしても、あの戦争は侵略戦争だと知った以上、志願できなかったのです¹⁸。志願しなければ過酷な目に遭いますけれども、それでも志願をして、「階級が上になって楽をしよう」とは思いませんでしたね。

軍隊と徴兵義務

駒野 高崎先生は、軍隊で他にどのような経験をされたのでしょうか。

高崎 例えば、ある夜、食事が終わったら、「整列！」という号令がかかった。「今晚、風呂へ行った者はこっちへ！ 行かない者はこっちだ！」と。すると、古参兵^{こさんへい}が風呂へ行った者の方へ行って、「お前ら、こっち見ろ！ 風呂へ行かなかった者がこれだけいる。お前ら、風呂なんていうのは、星一つや二つの人間が行くような所ではない！ そんな時間はない

¹⁸ 前同。高崎は以下のように述べている。

「戦争」が「戦争ごっこ」でないことぐらいは、だれにもわかっている。問題は、あの一五年戦争を侵略戦争と気づいていた者が、ごく少数にすぎなかったということなのだ。あるいは、たとえ気づいていても、国家によって血縁の者が人質にとられているかぎり、ほかにどうしようもなかったということなのである。だがしかし、私はそれだけの理由で、志願拒否という最低線だけは維持した（と思う）私自身を正当化しようとは考えていない。なぜなら、それでもなお戦争の前半期においては、若者たちの少なからざる部分が、兵役そのものを拒否して逃亡したという重大な事実があるからだ。たぶん、いや、まちがいでなく、その問題はこんにちの若者のほとんどすべてが知っていないはずである。というのは、この国のどこの大学でも高校でも、あるいはたとえどれほど「進歩的」といわれる教師でも、それは教えないし、マスコミはおろか、れっきとした学術書にも、そのことはただの一行も記されていないからである。（90頁）

はずだ!」と言って、彼らは殴られました。私は風呂に行かなかったから助かった。実は、前日に風呂へ行っていたのです(笑)。でも、今度はこっちに来て、「お前ら! なぜ、風呂へ行かないんだ! 向こうを見てみろ! 行った者があれだけいるんだ。お前らはもたもたしているから行く時間がなくなるんだ!」と言われて殴られました。結局は全員が殴られたわけです(笑)。これが日本軍隊の実状なのです。

駒野 上からの命令に嫌でも従わなければならないということ、それが軍隊の実態なのです。

高崎 そうです。また、ある夜、消灯の直後に週番下士官が廊下の銃を一・二挺取り上げて、おまえの銃は引鉄がかかったままと言うのです。私は用心深い性質なので、その日も二度・三度寝る前に引鉄を引いて確かめているから、それはありえないことなのです。あとで古参兵が「退屈しのぎの初年兵いじめだから気にするな」と教えてくれましたが、引鉄がかかったままだったといわれれば抗議のしようがないのです。週番下士に「九九式短小銃殿、あなたのおやすみになる前にやすませていただきました」と言われました。

一番呆れたことは、私がトイレに行こうと思ったらそこに上等兵が待っていた。私はもちろん、敬礼して前を通ったのだが、「おい、お前、娑婆^{しやば}¹⁹にいる時に何をしていた?」と私に聞いてきた。私は「学生でした」と答えた。すると、「なに、この野郎! 学生なんか偉くはないんだ!」と言われて、いきなり殴られました。私は事実を言っただけですよ。何度も言いますが、それが日本軍隊であり、日本の徴兵義務の実状なのです。

将来、日本がこのような状態になるのではないかと私は恐れています。なぜなら、日本人の体質は、戦時中から一向に変わっていないからです。

4. 1945年8月15日

法政大学へ復学(1945年10月1日)

駒野 1945(昭和20)年10月1日、高崎先生は法政大学へ復学され、国文学者の片岡良一と運命的な出会いをされております。高崎先生は片岡先生に教わり、非常に影響を受けられたようですが、どのような先生だったのでしょうか。

高崎 私にとって、大変影響を受けた先生は何人かいますが、一番影響を受けたのは片岡良一先生です。片岡先生は、近代文学の研究家であると同時に評論家でありました。また、戦前において、「昭和の文学」の研究を学問として定着させた第一人者ということになっています。

私は片岡先生の方法論から強い影響を受けましたね。片岡先生は一つの言葉、一つのセンテンスに非常にこだわるのです。近代文学の研究でも、いわゆる「歴史社会学派」という流派でした。「歴史社会学派」とは、「ある作品を考える時、その作品が成立した時代背

¹⁹ 『広辞苑』第五版参照。

娑婆 自由を束縛されている軍隊・牢獄または遊郭などに対して、その外の自由な世界。俗世間。

景を抜きにしては評価できない」という立場を取ります。

平山 歴史上の人物の人生を時代の中から徹底して洗い、そして、その過去をとにかく可能な限り、正確に描き残すことが重要であるということですね。

高崎 片岡先生の授業では、例えば、横光利一^{よこみつりいち}（1898-1947年）の文章中にある「急行列車は、沿線の小駅を黙殺して通過した」という一つのセンテンスの中の「黙殺」という言葉について、90分も講義されるのです（笑）。片岡先生は「『黙殺』というのは、同じ土俵にいる相手に対して使う言葉だが、生き物と同じように『急行列車は、〔……〕黙殺して通過』という意志を持つ存在」と、考えるわけです。さらに、「横光利一にはこのような文章もある」という別の例も出してくるのです。つまり、作品を理解するには、一つの作品だけを読んだだけでは不十分なのです（笑）。いってみれば推理を基底に据えた本当にすばらしい先生でした。

駒野 高崎先生がそのように思われたのは、戦時中、伏字^{ふせじ}²⁰のある本を読まれていた経験があったからではないでしょうか。

高崎 その読み方に近いですね。片岡先生の講義を受けながら、「私もそう思っていた。先生はすごいな！」と感銘を受けました。しかし、私はせいぜい、「物事を表から見てはどうだろうか？ 裏側から見るとどうだろうか？ 横の方から見るとどうだろうか？」ということぐらいの判断しかできなかった。ところが、片岡先生はさらにいろんな別の角度から見るとどうなるのか、講義されたのです。

戸田城聖の抵抗

平山 高崎先生は一つのフレーズに対して、いろんな角度から徹底的に光を当てる「歴史社会学派」の文学研究方法を見事に継承されているように思います。

高崎 その方法を用いないと、戦時下の牧口常三郎、戸田城聖の行動は絶対に分からないと私は考えています。単に、「戸田城聖が偉かったから権力に屈服しなかった」という認識だけでは不十分です。牧口常三郎、戸田城聖を理解するには、「どのような状況下において、どのような主張を掲げ、行動したのか」を捉えなければならないのではないのでしょうか。戦時中、ストレートに物を言うことは不可能なのです。人間の信条を変えてしまうほど、国家権力というのは強大な力を持っているのです。だから、子どもや女性を含めた日本人が戦争に総動員されて、その人たちは心から信じ込まされて戦争に協力したという現実を捉える必要があります。

先程も言いましたけれど、戦闘状況を考えることが戦争を知る唯一の方法だと勘違いしてはいけません。

²⁰ 前同。

伏字 印刷物で、明記することを避けるために、その字の箇所を空白にし、また○や×などのしるしで表すことという意味。戦時中、多くの書物に伏字が見られた。

駒野 私たちはどのような姿勢でテキスト（原文・文章）に迫れば、真実が初めて明らかになるのか。あるいは、一つのテキストを読む時に、その背後にある意図や歴史性をつかみ取るまでの「格闘」というのでしょうか。それが難しいと思います。

高崎 その人物の生きた時代が分からないとどうしようもないのです。だから、牧口常三郎の書いた本の背景にある政治状況や社会環境を切り離して、その本の中身を何百回繰り返して読んでも、それは単なる知識を得るだけです。肉声はきこえてこない。牧口常三郎や戸田城聖はその時代環境の中で悪戦苦闘しながら考え、文章を書いているわけですから。

戦後、戸田城聖が戦時下の自分の有様^{ありよう}について、「形の上では服従するけれども、心は決して服従などしていない」という意味のことを言っています。つまり、戸田城聖は、「皆は権力に服従しても、自分は心から服従してはいない。外観、外形では言われた通りにしたが、心は決して服従していない」ということです。それは、裏づけをもつ戸田城聖だから言えたわけです。

高校教師として教壇に立つ

平山 高崎先生は法政大学卒業後、1948（昭和23）年4月から高校の教師として教壇に立たれておられます。

高崎 そうですね。1948（昭和23）年4月から1975（昭和50）年3月までです。合計すると26年間ですね。最初の13年間で専任で、後の13年間で非常勤です。ただし、一つの学校での非常勤では生活できないから、一番忙しい時では三つの学校を掛け持ちしていました。ただ、私にとって良かったのは雑用がなかったことで、その時間を利用して勉強しましたね。教師は忙しいと思うけれども、夏休みとか春休みとか、まとまった休みがありました。ものを書くにはまとまった休みが必要なのです。

駒野 高崎先生は当初、シベリア出兵²¹に関する研究を志しておられました。しかし、その後むしろ、ダイレクトに戦争文学へと変更されています。

高崎 それは1950（昭和25）年に朝鮮戦争が始まり、私は「前の戦争は、一体何であったのか」と考えたからです。また当時、私は20代で、かつ戦争体験がありましたから。

²¹ 高柳光寿・竹内理三編『角川日本史辞典』（1976年5月、角川書店）参照。

シベリア出兵 ロシア革命への干渉戦争。1918（大正7）年から数年間にわたり、日・米・英・仏がシベリアに出兵。1918年3月、ソビエト政権がドイツと単独講和を締結するや、7月、上記4国はシベリアにいるチェコスロバキア軍捕虜救済の名目のもとに、総兵力二万八千（日本、一万二千）の協定を結び出兵に踏み切った。日本は協定を無視して、3ヵ月後には七万三千の兵力を送り、東部シベリア要地を占領。四国連合軍は反革命勢力を支援したが、住民のバルチザン闘争に悩まされ、1919年秋には反革命のボルシヤック政権が赤軍に敗北。干渉の失敗は明白となり、1920年6月までに米・英・仏は撤兵。日本のみは出兵を続け、さらに、1920年、尼港事件の報復と賠償の保障として北樺太を占領した。しかし、ソビエト政権と人民の抵抗は強まり、日本国内での反対の世論、列強の抵抗は強まり、1922年、シベリアから、25年、日・ソ国交回復とともに北樺太からも撤兵。戦費10億円を費やした出兵も内外のはげしい非難を受け、何ら得るところなく失敗した。

南京事件調査研究会の闘争

平山 今回の『学生平和論集』では、戦後以降の歴史教科書研究を行いました。その研究で見え始めてきたことは、1970年代以降に「南京事件」に関する記述が現れ始めたということです。これは、高崎先生が所属されていた「南京事件調査研究会」の活動時期と一致します。ここで、ぜひ、その研究会について伺いしたいと思います。

高崎 まず、「南京事件調査研究会」が正式に発足したのは1984（昭和59）年3月ですが、発足以前は、朝日新聞の本多勝一ほんだかついち氏、徳間書店の和多田進わただすすむ氏、早稲田大学の洞富雄ほらとみお氏、講談社の私の四名が個々に戦っていました。その相手は、「南京事件というのは幻である」と報道した文藝春秋社を中心とするメディアです。4、5年間、個々で戦っていた時、本多氏から私に「研究会を作ろうよ」と連絡があり、その後、私たち4人で研究会を発足させたのです。

平山 1972（昭和47）年11月、高崎先生は「『南京大虐殺』は、巷説こうせつに相違しすでに戦争中に書かれ発表されていた²²」ことを指摘されております。

高崎 そうですね。そのような事実があるにも関わらず、山本七平やまもとしちへい（＝イザヤ・ベンダサン）が文藝春秋社の『週刊文春』や月刊の『文藝春秋』『諸君！』という雑誌を拠点に、毎月、私たちに攻撃をしかけてきました。十年間、私たち4人はその攻撃に立ち向かったわけです。最も激烈であった頃、本多氏は2年間も家へ帰ることができなかった。大晦日であろうが元旦であろうが、毎晩、本多氏の家の前に右翼の見張りがいた。私も電話や手紙で何回か脅迫されました。

平山 具体的には、どのような論争が繰り上げられたのでしょうか。

高崎 彼らはまず、「中国人は100人前後しか殺されていない」と言っていました。しかし、私たちが戦ってきた十年間の内で、南京事件で殺された中国人の数が「100人」から「1000人」、「3000人」となり、ついに「10000人」を越えたわけです。つまり、彼らはそこまで認めたのです。だから、「南京事件は幻だ」という説は成り立たないわけです。

十年間を経て、私たちがどうやら勝ちました。それで、研究会の人数を増やすことになり、朝日新聞が「南京事件調査研究会を公に結成した」と報道しました。そして、16人増の合計20人で、この研究会の正式な一年目がスタートしたわけです。

駒野 私たちは日中国交を語る際、高崎先生をはじめとする「南京事件調査研究会」の方々が、自分の地位と危険とを顧みず戦われた足跡を認識する必要があると思います。

高崎 右翼に命を狙われるという危険な状況の中で、「南京事件調査研究会」は悪戦苦闘して現在までやってきたのです。しかし、今なお、南京事件の問題は決着がついていません。まだ、戦いの途中なのです。

研究会のメンバーは、大学の先生やメディア関係の人から、「そのような研究に首を深く

²² 高崎前掲書『戦争文学通信』、65頁。

突っ込むのは愚かな話である。何の利益もない。やめた方がいい」と言われてきました。それがこの国の現実なのです。だから、私がどうしても言いたいのは、「日中国交の問題は全て解決できた。南京事件調査研究会など聞いたことがない」というのではなくて、この研究会は20数年間も戦い、今もなお戦い続けているということです。このような状況が日本にはあることを知った上で、日中友好のための考えを持ってほしいと思います。

5. 戸田城外編集雑誌『小学生日本』『小国民日本』

戸田研究者として

駒野 高崎先生は、戸田先生が戦時中に出版されていた『小学生日本²³』『小国民日本²⁴』という雑誌と出会われたと伺いました。それはいつのことでしょうか。

高崎 私が35、6歳の時なので、1960年頃、高校教師の時ですね。戦争中は用紙の配給問題があったので、単行本として出版されるのは少数です。つまり、評論や小説などが雑誌に掲載されたままで、単行本化されていないわけです。単行本に関しては、図書館である程度、読むことができましたが、雑誌は図書館で揃えていません。また、誰に聞いても、戦時下の雑誌についてくわしいことは分からなかったのです。だから、自分で雑誌を探す以外に方法はなかったので、私は戦時下の雑誌を集め始めたわけです。その過程において、戸田城外²⁵編集の『小学生日本』という雑誌を見つけたのです。

平山 高崎先生は教師をされていた中、戦時下の雑誌を研究されていたのですね。戸田先生の雑誌に出会ったのは、高崎先生が非常勤講師へ移った頃でしょうか。

高崎 その時ですね。例えば、月曜日の昼と夜とに非常勤として働くとします。そうすれば、その日の昼間に2、3時間の余裕を持ってました。その時間を利用して、私は東京中の古本屋を歩き回りました。

教育にかける戸田城聖の思い

駒野 高崎先生が『小学生日本』の雑誌を購入されたのは、やはり、戸田先生が編集していたからなのではないでしょうか。

高崎 いや、そうではないのですよ。その雑誌を購入したのは、戸田城聖が編集していたからで

²³ 戸田城外は編集兼発行人として、1940(昭和15)年1月1日、月刊雑誌『小学生日本』(小学生日本社)を創刊。

²⁴ 1941(昭和16)年4月、小学校が「国民学校」と改称された。また、「児童」という子どもの名称が廃止となり、「少国民」とされた。そこで、戸田城外は『小学生日本』の誌名を『小国民日本』と改題する。高崎は、文部省の決めた「少国民」という名称をあえて「小国民」として表現し、それを用いて誌名とした戸田城外の抵抗に対して、「文部省の育てようとする子どもと、自分の育てる子どもはまったく別の子どもなのだ」という確固とした考え方の表明なのである(高崎前掲書『戸田城聖 1940年の決断』、132-133頁)と指摘している。

²⁵ 戸田は1945(昭和20)年7月に出獄した際、「城聖」と改名する。

はなく、実は、その雑誌に^{やまもとかずお}山本和夫の「戦地での体験」を記した文章が掲載されていたからなのです。そこで、私は戸田城外と「出会った」というわけです。

戦時中、山本和夫という人は詩人のナンバーワンだと私は思っていました。彼は当局に^{にら}睨まれたと思いますけれども、彼が検挙されなかったのは兵隊だったためです。だから、日本軍部は山本和夫の詩を「これは困った詩だな」と思っただけで、検挙できなかったのでしょう。

駒野 そうだったのですか。『戦争文学通信』の中で、高崎先生は山本和夫の詩を取り上げられていますね²⁶。戸田先生は山本和夫とどのような交流があったのでしょうか。

高崎 まず、山本が兵隊だったのは、日中全面戦争が始まった直後から2年間ぐらいです。『小学生日本』の文章は別として、当時、山本は戦争に関する詩以外、何も書いていません。おそらく、戸田城外は当時、山本の詩集を読んでいたのでしょう。というのは、戸田城聖には詩をつくる才能があったのではないかと思うからです。そうでないと、『小学生日本』に外国の詩を掲載したり、誰がつくったのか分からない『雪のあした』という詩を巻頭に掲載しないですよ。

平山 例えば、イギリスのブラウニングの翻訳された詩が掲載されているのを見ると、よくあの時期に、英米文学を掲載できたなと思います。

高崎 あの時期には、日本と軍事同盟を結んでいたナチスやイタリアの詩人の作品がたくさん出ていたわけです。普通ならば、それらの作品を雑誌に掲載します。しかし、戸田城聖は、その時代にブラウニングの詩を掲載した。ちょっと考えられないですね。

また、そのことから推測してですが、戸田城聖はかなり詩を書き、また、教師の時には、国語の授業で子どもたちに詩を教えていたのではないのでしょうか。創立者がしばしば詩を書くのは、私の推測では戸田城聖の影響だと思います。

また、『推理式読方指導^{よみかた}』²⁷を見ると、戸田城聖には文学的な感覚があったのではないかと考えています。そのような感覚は、当時の小学校の先生にしては非常に素晴らしいものです。戸田城聖には他に、『推理式指導算術²⁸』がありますが、非常に論理的に説明されていると思います。

また、雑誌に作者不詳と書かれてある詩が掲載されていますが、おそらく、それは戸田城聖の書いた詩でしょう。編集責任者であればコラムなど必ず何か書くはずで。戸田城聖は自分を詩人だとは言いませんが、時々、詩をつくったり、また、人の詩を読むのが好きであったと思います。

駒野 戸田先生は『小学生日本』『小国民日本』の編集責任者として、どのような心境だったと

²⁶ 高崎前掲書『戦争文学通信』に収録されている「戦争詩特集」(55-63頁)に山本和夫の詩が掲載されている。

²⁷ 戸田城外・山田高正『推理式読方指導』は、1933年4月15日、城文堂より発刊。この指導書には五年生用と六年生用があり、また上下二巻から成り立っている。

²⁸ 戸田城外『推理式指導算術』は、1930年6月25日、城文堂より発刊。その後、版を重ね、四、五年で百万部を超えるベストセラーとなる。また、その指導書には、牧口の序文が寄せられている。

お考えでしょうか。

高崎 戸田城聖は戦前、学校の教壇に立ったわけです²⁹。「子どもたちはどういうことに関心を持っているのか」、また「子どもたちの才能は、教師の指導如何^{いかに}によってはどのようにも伸ばせる可能性がある。しかし、その指導を誤ると、取り返しのつかないことになる」ということを、戸田城聖は知っていたと思います。つまり、教師の良い所、悪い所、性格、思想、見方などが子どもに乗り移っていくことを知っていたということですね。

また、戸田城聖は子どもたちに対して非常に愛情を持っていたと思います。だから、「当局の方針に忠実な、あるいは、時によってはその方針を先取りするような教師が増えたら困る」と、戸田城聖は考えたと思います。また、「自分の編集している雑誌を1000部発行すれば、少なくとも3000人ぐらいの子どもを救うことができる」と思ったはずです。そのように戸田城聖が考えるようになった基礎は、間違いなく牧口常三郎の影響ではないでしょうか。

創立者と『サクラ読本』

平山 現在、教科書問題が浮上ってきております。例えば、「新しい歴史教科書を作る会」は、自分たちの作成した教科書の検定合格を狙おうとしています。その内容を読むと、戦時中の教科書を思い起こさせるようなものとなっています。

戦時中の教科書は、戦争を美化し、偏った愛国心を培うようなものがほとんどであります。その典型的な教科書として『サクラ読本^{どくほん}』が挙げられます。この教科書について、高崎先生はどのように考えておられますか。

高崎 『サクラ読本』は1933（昭和8）年4月、国定の新教科書として出てきました。そして、その年に入学した一年生からその教科書は使用されました。その一年生は、1926（大正15）年4月2日から1927（昭和2）年4月1日の間に生れた子どもたちです。そのような新教科書を使わせる準備は、すでに15年戦争開始、つまり、満州事変開始の直後から始まっていたのです。その『サクラ読本』を一言で言えば、これは明らかな軍国教科書です。

戸田城聖は編集していた『小学生日本』『小国民日本』の中で、この『サクラ読本』によ

²⁹ 戸田城聖の小学校教師としての経歴を、『年譜 牧口常三郎・戸田城聖』（1993年11月、第三文明社）に基づき、以下に記す。

1917（大正6）年6月20日、尋常科准訓導の検定試験に合格し、翌1918（大正7）年6月25日、真谷地尋常小学校（夕張郡登川村真谷地）に代用教員として採用される。この時、本科正訓導の資格を取ることを決意し、同年12月24日、尋常小学校本科正訓導の資格を取得する。翌1919（大正8）年の夏、正教員の資格試験に合格。翌1920（大正9）年2月、上京を志し、校長代理に退職を申し出る。同年3月、卒業式を待たず真谷地尋常小学校を退職。同年の春頃、当時、西町尋常小学校（現在の台東区下谷）の校長であった牧口常三郎の自宅（目白）を訪問。自らの経歴や意見を述べ、教職への採用を願い入れる。牧口のはからいで、西町尋常小学校の臨時代用教員に採用される。同年7月、牧口の三笠尋常小学校（現在の墨田区亀沢町）への転任に伴って、同小学校へ転勤。同年12月、三笠小学校の訓導となる。1922（大正11）年3月30日、三笠小学校を退職し、大学への進学を展望して新たな生活に入る。（143-154頁）

って育った子どもたちと対面せざるをえない局面に立つことになるのです。

駒野 『サクラ読本』で学習していない子どもたちとそうでない子どもたちには、どのような違いがあったのでしょうか。

高崎 違いはたくさんありますね。一つの例を挙げれば、私の場合、「神話は神話である」「事実とは別の話が伝わっている」と最後まで教わりましたね。ところが、『サクラ読本』で学習した子どもたちは、「神話は事実だ」と教わったのです。このように、わずか一年の差で、旧教科書で学んだ者と新教科書で学んだ者とは、物の見方や考え方という点で、超えることがほとんど不可能なほどの溝^{みぞ}で隔^{へだ}てられてしまいました。実際、『サクラ読本』で育った二つ歳下の弟から、「国賊だ^{こくぞく}」と罵^{ののし}られました。私は『サクラ読本』で学習しなかった最後の世代ですが、もし、それで学んでいたらどうなっていたらと思うかと思えます。

駒野 創立者は1928（昭和3）年生まれなので、『サクラ読本』で学習した世代になります。『戸田城聖 1940年の決断』の中で、高崎先生は「『サクラ読本』の子どもたちは、戸田城聖（城外）が、命がけで育て、命がけで守ろうとした世代である³⁰」と書かれています。

高崎 『サクラ読本』で学んだ子どもたちは、1945（昭和20）年8月15日の敗戦を「どんなに悲しみ、どんなに嘆き、どんなに苦しんだか」と私は思いますね。だから、ロケット弾や機関銃の弾なんかを浴びた私よりは、『サクラ読本』の子どもたちのほうがはるかに酷い心の傷を負って、戦後を生きてきたと思います。

終戦後における戸田城聖の闘争

平山 戦後、戸田城聖はどのような覚悟で闘争を開始されたのでしょうか。

高崎 戸田城聖が刑務所から出たのは1945（昭和20）年7月です。その後のひと月は、一人で戦ったと私は思いますよ。味方はいなかっただろうと思います。なぜなら、迂闊^{うかつ}に戸田城聖に声をかけると、「戸田の仲間だと思われて捕まるのではないか」と感じていたでしょうから。

だから、私がどうしても言いたいのは、あの戦争下、戸田城聖は「どうすれば国家権力に殺されないで、自分の思想、信念を一般の国民に伝えていけるか」ということを毎日毎晩、考え続けたということです。それを理解しないと、戸田城聖の戦後の再出発が分からないと思います。

³⁰ 高崎前掲書『戸田城聖 1940年の決断』、201頁。

戸田城聖の「原水爆禁止宣言」

高崎 また、戸田城聖の「原水爆禁止宣言³¹」は、ある日、突然思いついたものではありません。それは、戸田城聖が戦時中から常に考え、行動し続けてきた原理の結論です。

私がおのように言えるのは、戸田城聖の戦前・戦中・戦後の足取りを調べてきたからです。だから、過去というのは人間にとって大事なのです。繰り返し強調しておきますが、今の若者に「過去を切り離すと、未来が見えなくなる」と私は言いたいのです。

6. 創価大学の未来

駒野 創価大学は、牧口・戸田・池田の三代会長の精神の結晶であると言えます。私たちはその創価大学の学生ですが、牧口・戸田・池田について学んでいくことが創大生の一つの使命だと思います。

高崎 戸田城聖が戦前から戦後にかけて考えていたこと、そして、行動したことを調べれば、池田名誉会長が今、何を指されているのかが分かります。その上で、「池田名誉会長が何を考え、どのような歩みを続けているのか」をきちんと把握すれば、どのような時代になったとしても、池田名誉会長の意志を継ぐことができると私は思っています。若い学生、特に創価大学の学生はその道を進むことができるし、また、そうしなければならないと思います。そして、若者はその先をさらに発展させなければなりません。だから、過去というのは大事なのです。

平山 創価大学には、日本で起きている問題に対して強い関心を持っている学生が大勢います。それは牧口・戸田・池田の賜物だと思います。「今、その精神を大学で受け継ぐことはどうということなのか」が問われています。

高崎 池田名誉会長の存在に自分たちは守られているという考えを持ったなら、それは甘えです。池田名誉会長の言われたことをどのように受け止め、どう発展させるかが重要なのです。

皆さんに一つ伝えたいことがあります。牧口常三郎は創価教育の理論を追究した人間です。その弟子の戸田城聖はそれを現場で実践し、さらに、子ども向けの雑誌まで編集し、出版しました。少なくとも、戦前・戦中の牧口常三郎、戸田城聖はそういう人間でした。しかし、本当に牧口常三郎、戸田城聖の偉大さを理解するためには、戦前・戦中の時代のコンテクスト（文脈）の中で考えなければならないということです。つまり、時代と切り離れた実践活動や理論はいくら考えても、答えが出てこないということです。それは、むしろ間違った答えしか出ないと思います。少なくとも、教員志望の学生にはそれを理解してほしい

³¹ 戸田城聖は1957（昭和32）年9月8日、第四回東日本青年部体育大会「若人の祭典」（横浜・三ツ沢グラウンド 5万人）に出席。閉会式の席上、遺訓として、「原水爆禁止宣言」を発表。「原水爆は「魔」の産物であり、それを使用したものはたとえ勝者であっても、ことごとく死刑に処すべきである」と宣言。「私の弟子であるならばこの声明を継いで、全世界へこの思想を浸透させてもらいたい」と訴えた。（前掲書『年譜 牧口常三郎・戸田城聖』、412頁）

ですね。

駒野 教師を志している私にとって、高崎先生の今のご指摘は本当に身に沁^しみる思いです。

高崎 特に教員志望の学生は、牧口常三郎の理論と戸田城聖の実践を最低限、勉強しなければならぬと私は思っています。池田名誉会長の先生は戸田城聖であり、その戸田城聖の先生は牧口常三郎なのです。それを勉強しないと、正しい歴史観を持つことができません。信念とは、やはり、歴史認識によって確立するものだと私は思っています。

駒野 本日は、貴重なお話をお伺いすることができました。誠にありがとうございました。

後記 本インタビューは、2003年12月20日、2004年5月8日、11月13日の計3回に渡って行われたものを編集したものである。なお、本文と脚注における引用文中の傍点、および〔 〕内は、インタビュアー（＝駒野晃司）による挿入である。

—編集部より—

このインタビュー記事はもともと『創価大学学生平和論集』第3集（創価大学学生自治会発行、2005年、28-54頁）に掲載されたものである。高崎氏ご遺族、創価大学学生自治会はじめ、本誌での再掲載をお許し下さった関係者の方々に謝意を表したい。